



第11回オンライン読書茶話会

東経大図書館企画

2022年2月26日（土曜日）

午後4時－午後5時30分 Zoom Meeting

進行役：高津秀之（西洋史） 米山高生（経営史）



リンク先とコードは以下のとおり

第11回オンライン読書茶話会（東経大）

時間: 2022年2月26日 04:00 PM 大阪、札幌、東京

<https://us02web.zoom.us/j/83049775064?pwd=VnUvdFNDcUQzc2tGb2hsbFFhbUF3dz09>

ミーティングID: 830 4977 5064

パスコード: 750596

少し前から入室可能です。入室されたらお名前がわかるように変更をお願いします。

読書茶話会にようこそ！



読書茶話会（さわかい）の二つの特徴

- I. 季刊『**読書のいずみ**』（大学生協）に掲載されている書籍を選書し、それを読んで語り合う場。
 - 気軽な発言**を歓迎。
 - 学習ゼミでないので、**気の利いた結論**がなくても大丈夫。
 - 読んでいない方の出席**でも大歓迎。
- II. 主催者による企画：ブックトークなど。
 - 前は、音楽学者で本学の客員教授である**久保田慶一先生**をお招きして、**新著『14歳からの新しい音楽入門』**を中心にお話ししていただきました。
 - 今回は、「本の読み方」をテーマに、参加者に自分流の読み方について語っていただく会としたいと考えています。

オンライン読書茶話会への参加方法



- **読書に興味をもつ学生・院生ならだれでも参加できます。**
- 東経大の学生以外にも、東経大教員をはじめ、「読書マラソン」担当の生協職員、職員の方なども参加されています。
- 季刊『読書のいずみ』の編集・執筆に携わっている学生スタッフも、全国から参加してくれます。
- 初めてのの方は、図書館、生協の担当者にご希望を伝えていただければ、図書館長の米山からリンク先等の案内をお送りします。
- 当日は途中退出も大丈夫です。Zoom ですのでお気軽に参加してください。

季刊『読書のいずみ』は図書館でも配布しています。



今回は、季刊『読書のいずみ』No.169、2021年秋号からの「選書」です。生協書籍部または、図書館の「オンライン読書茶話会」のコーナーでも無料で入手できます。





経営学部の泉洋平さんがとりあげたのは、川添愛『言語学バリ・トゥード』です。帯のコピー「読むなよ、絶対に読むなよ！」は、「押すなよ、絶対に押すなよ！」（ダチョウ倶楽部、上島竜平）からのバリエーション。エッセイでは、意味と意図の違いを論じ、AIがその違いを見極めるのは難しいことを指摘する。なるほど。プロレス、お笑い、おやじギャクに精通していないと、理解が難しいところがある。しかし面白さは抜群。また面白くて為になる。何の為になるかは定かではないけれど。



『五つ星を付けてよ』 奥田亜希子／新潮文庫

自分が「好き」と信じたものを、貫き通すのはこんなにも難しくなったのか。SNSの普及で、考えなくてもいい心配が増えた気がする。誰が決めたかわからない評価を気にして、買い物も、友好も、恋も、全て面倒くさく感じてしまう世界になった。第三者の声なんかいらぬ。私は私のまま、自分の意見に自信を持たなくては行かない。誰がなんと言おうと、他人からの評価を気にせず、自分の気持ちを一番に信じようと思った。

(愛知大学／ゆずもも)

担当の亀岡大河さんは、経営学部の1年生。ということは4月から2年生。フレッシュです。現代の小説は、SNSやスマホなくしては語れませんね。この本も現代のお話みたいです。五つ星というとミシュラン。他人の評価だが、ミシュランぐらいになると一人歩きしやすい。「ゆずもも」さんの感想だと、あらためて自分の気持ちを一番に信じようとする、物語のようですね。



私の世代には懐かしい一冊。
映画化もされました。駄作でしたが。
高津先生の世代、また今の学生さんが
この話をどう読むのか興味津々です。



庄司薫

「赤頭巾ちゃん気をつけて」

新潮文庫／定価539円（税込）

1969年東大入試が中止になり、本書の主人公は大学に行くのをやめて独自に知性を伸ばそうと試みる。「みんなを幸福にする

にはどうすればいいか」が彼の抱える最大の問題だ。本書の中で彼は明確な結論には至っていないが、幼馴染の由美や偶然出会った小さな女の子に対する彼の優しい言動に答えの一端が示されている気がする。 （北岸）

ヒトラーとナチ・ドイツ

石田勇治

なぜ文明国ドイツに ヒトラー独裁政権が 誕生したのか？



ヒトラーの
実像から
ホロコーストの
真実までを描く
決定版！

講談社現代新書

「新書で読む歴史」から、米山はこの本を選んでみました。文明国ドイツというのは、哲学者カントやニーチェを生み、文化芸術も発達していた、ワイマール共和国を指しています。ただしワイマール共和国には、いくつかの弱点がありました。ヒトラーは巧みにこの弱点を突きます。

著者の石田勇治さんは、荻上チキさんとのラジオ対談がこの本の誕生のきっかけとなったと書いています。ナチによるユダヤ人の大量殺人という正気の沙汰とはいえない事件が、ヒトラーへの忖度や民衆の無関心などによって生まれたこと。そしてそれを食い止める鍵は、民主的な手続きの尊重と民主主義の精神だったことが、あらためて明らかになります。

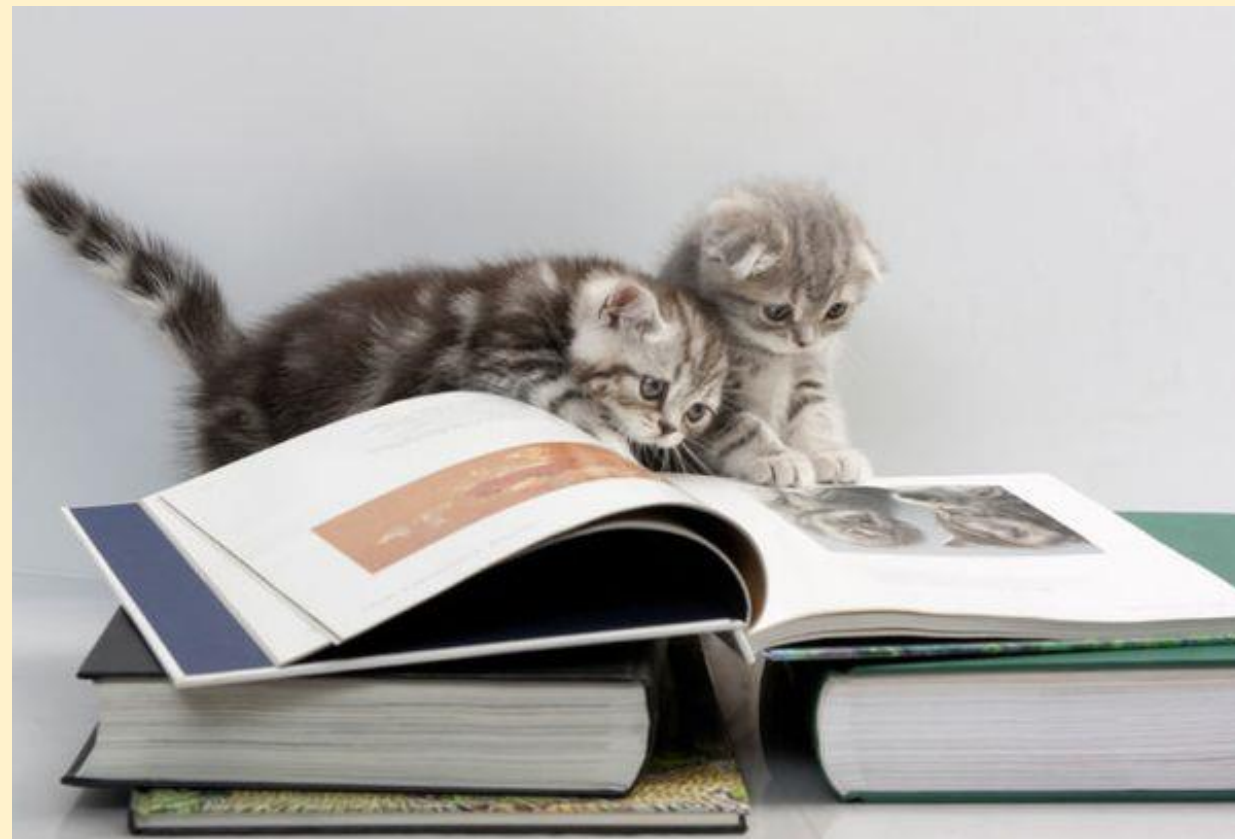
わたしたちの身の回りにも弱点があり、それを狙うポピュリズムの陰があります。盲目的な西洋中心主義は戒めるべきですが、個人の意思を尊重する民主主義には普遍的な価値があると、あらためて思いました。



企画：私の本の読み方



本の読み方は、人それぞれだと思います。今回は、自分の本の読み方をお話してください。参加者すべての方からお話を聞かせていただきたいと思います。ベテランの方は、読書に関する経験談でも構いません。よろしくお願いします。



お問い合わせは、米山高生 yone@tku.ac.jp まで。